死んでいた狒狒

田中貢太郎

昔から山には魑魅（ちみ）、水には魍魎（もうりょう）がおると云われているが、明治二十年比（ごろ）の事であった。日向（ひゅうが）の山奥で森林を伐採した事があって、附近の者は元より他国からも木客（そま）が集まって来たが、その木客だちは、昼は鬱蒼（うっそう）たる森林の中ではたらき、夜は麓（ふもと）に近い山小屋へ帰って来た。

それは夏の夜の事であった。木客たちは夕飯の後で、例によって露骨な男女の話をしていると、谷を距（へだ）てた前方（むこう）の山から、

「おうウイ」

と云う声が聞えて来た。それは何人（たれ）かが此方（こっち）へ向っ

て呼びかけている声であった。ところで木客だちは、そのおうウイの声を酷(ひど)く忌(い)み嫌っているので、何人もそれに応ずる者はなかった。と云うのは、その声は山の怪異の呼びかける声で、万一それに応じでもすると、一晩中応答しなくてはならぬが、そんなに長く声の続くものでない。それで声が続かなくなるような事でもあると、得態(えたい)の知れない毒素に当って血を吐いて死ぬると云われていた。木客たちは顔を見合わして黙っていたが、前方の声は後から後からと聞えて来た。ところで、前方の声は魅力のある人を惹(ひ)きつける声で、うっかりしていると引きこまれて返事をしたくなるので

あった。

広島県の者だと云う壮(わか)い木客の一人が、その時ふらふらと起(た)って外へ出て往った。一座の者は便所にでも往ったろうと思っていると、小舎(こや)の外の崖の方から、

「おうウイ」

と云う壮い木客の声が聞(きこ)えて来た。すると前方の声はそれに纏(まとわ)りつくように、

「おうウイ」

と応じて来た。と、又壮い木客の声がそれに応じた。

「おうウイ」

「おうウイ」

「おうウイ」
「おうウイ」
壮い木客の声と前方の声は交互に聞えだしたが、その声はしだいしだいに熱を帯びて来た。小舎の中の者はじっとしていられなくなった。
「こりゃ、いかん」
「此のままにしておかれない」
「負けたら、大変だ」
「山の者を皆呼んで来い」
小舎の中の者は蜘蛛の子を散らすように外へ出た。
そして、壮い木客の傍へ往く者もあれば、近くの小舎

から小舎へ同儕（なかま）を呼びに往く者もあった。その時壮い木客は、月の光を浴びて狂人のようになって呼び続けていた。

「おい、おい、休め、休め、俺が代ってやる」

木客の一人は、壮い木客を突き飛ばすようにしておいて、自分で代（かわ）って、

「おうウイ」

をはじめた。そして、その男が疲れて来ると他の者が代ってやった。木客の数は多いので幾何（いくら）でも応ずる事ができた。と、そのうちに前方の声が弱って来て、小さな声になり、やがてそれがぴたりやんだ。一同は

勝鬨をあげて壮い木客を伴れて小舎の中へ入ったが、その時はもう黎明に近かった。

朝になって彼の壮い木客は、谷の前方の声のしていた方へ往ってみた。そこに杉の大木があって、その根元に大きな狒狒が口から血を吐いて死んでいた。

底本：「伝奇ノ匣6　田中貢太郎日本怪談事典」学研M文庫、学習研究社
　　　2003（平成15）年10月22日初版発行
底本の親本：「新怪談集　実話篇」改造社
　　　1938（昭和13）年
入力：Hiroshi_O
校正：noriko saito
2010年10月20日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。